

コラム

福島原子力事故を考える
客員研究員 新井 光雄*

現在進行中の東京電力・福島第一原子力発電所の事故。非常事態。そのこと自体を考えるには、その能力には残念ながら全く欠ける。何人かの原子力関係の学者、技術者に話を聞く機会を持ったが、それで理解が深まったということでもない。まだ予断を許さない混沌というのが目下の状態のようだ。そこで何かを書く。無謀かもしれないとは思いつつ、一方で書くことの義務も、感じないわけでもない。正直、複雑だ。理由は簡単。原子力についてはその必要性を世間に説いてきたからである。

この複雑さはどうやら個人のものではない。周辺にいた多くの人を巻き込んでいる。今後の原子力問題への流れの中身が変わる可能性を感じるところがある。簡単にいえば反対・賛成の単純さから脱する機会になるかもしれないということだ。事故後にある雑誌の編集者に会った。第一声は「これでお互い、坊主になって出直しですね」だった。言わんとするところは、「こういう事故は日本では絶対に起きない」を前提にしてきたからだ。電力会社の関係者が口をそろえてそう断言していた。多くの資料などがチェルノブイリとの比較、その違いなどから、絶対に近く、事故はないということをしつこいほど強調していた。当然、今も手元にはそうした資料がややむなしさを抱え込んで残っている。なかには間接的だが関与したものもあり、微妙な心理状態に追い込まれることになる。絶対を、恥ずかしながらほぼ確信してしまっていた。

反対派の非論理の不安からくる反対に比べ、原子力支持の説明は論理的。「日本では大事故はない」にはそれなりの説得力があると思えた。長い付き合いの原子力関係者の独特の真面目さも結構、原子力支持には影響が個人的にはあったと思っている。批判ばかりではめられることのない原子力に判官贔屓とも言える感情を持ったことも事実だろう。こんなに世間の厳しい目のなかで、真摯に取り組む原子力。弛緩した日本でこんなに真剣に真面目な集団は原子力関係者以外にはないので、とまで思った。これらは全て事実だ。目下の、この駄文を労するのみの時間にも現場では文字通りの命がけの復旧作業が続けられている。頭が下がる、などという言葉ではすまされないが、ほかに言葉がない。

それでも事故は発生してしまった。歴史的な事故である。提言も分析も到底不可能だが、せめて原子力と自分の関係性を考えることで、原子力の持った社会的な一面を書き留めておこう。新聞社によって多少の違いはあるが、原子力には多くの部門が関わる。事故関係は現場を持つ地方支局、地方部、今回のような大事故には社会部、それに科学部。当方が所属していた経済部は経済産業省、東京電力などを通しての分野という形だった。紙面は一体的だが、なかは縄張りのようなものが見えない形で存在する。経済部に所属していたため、事故を直接、記事にしたことはほとんどない。ある意味で原子力は存在することが前提という環境に置かれていたということかもしれない。むろん、それでも賛否の立場は微妙に出てくる。電源構成などを議論する時などに

* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

自ずと、その立場が明確になり、各社、各記者の方向が分かる。社論賛成一記者個人反対。社論反対一記者個人賛成。社論賛成一個人記者賛成。社論反対一個人記者反対。図式化すればこんな格好。その賛成、反対も度合いがあるから、実態は複雑だったが、個人的には第一次石油危機でエネルギー問題を専門的に担当することとなり、その選択を迫られた。社論賛成一個人的疑問という立場だった。当然だ。まだ原子力などまるで何も知らなかった。知る必要も全くなかった。

今では基本的なことに関しては講演やら大学のエネルギー講座で簡単に触れる程度のことをしているのだが、何か特別事情で関心を持つ人、学生を除き、多くの方は当方の担当以前の状態。つまり原子力のことなどまるで知らないという実態を知ることになる。原子力の面倒さは、その知らない状態のままで、周囲から時に「賛否」を問われることがある点だろう。

しかし、どこまで知ればいいのか。目下の事態など、どうにもならない。核エネルギー専門、機械専門、電気専門、放射性専門などなど。原子力は総合科学の塊。原子力に関わって半世紀という、ある専門家に聞いたところ、「分かるという実感で最大四割という感じ」という。当方など到底、語る資格なしに近かったのだ。それでも原子力は必要としたのは妄信に近かったのか。そうとまで言う必要はないのかもしれない。原子力が基本的なエネルギーであることは世界のなかの原子力を見れば、自ずと証明されているようにも思える。

ある東大工学部の学生は「今まで原子力は議論することすらタブー視されてきたようなところがある。今回の事態を契機に議論をオープンにしていけるのでは——」という見方もあるようだ。また、関係者のなかには「案外、反対論が静か」という声もある。これらは一つの側面だが、どうなのだろうか。個人的な言い訳に近いのでは、とも思える。

ある元電力マンは「もう原子力はいい。日本の原子力は安全と周囲に言い続けてしまった」という。さしずめ「坊主組」ということになるのだろうか。エネルギー問題担当の当初は是非疑問派だったが、多くの原子力を見聞。そこに働く人たちの真摯さも含めて、必要なエネルギーのひとつとしての原子力という位置づけが固まった思いでいたが、間違いなく今回の事態で揺さぶられている。原子力メーカーのOBのある技術者は「大学のクラブ活動の同窓会に出て、本当にコテンパンにやっつけられてしまった。大事故はないって言ってきてしまったからな」と嘆く。多分、これから原子力に関わってきた者として、それぞれがまた新しい原子力との関係を構築していくことになるのかと思う。それは多分、日本の国民の関係構築にも関わってくるのだろう。一体どの程度の時間がかかるのだろうか。事態の進行中に不謹慎かもしれない。今は事態の収束を祈るのみなのだろうから。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp